

4. 寄稿：碁会所開所7年目を振り返って (みなと囲碁将棋クラブ 席亭 河合盛彦)

私のサラリーマン人生最後の仕事は震災復興の手伝いだった。2011年3月東日本大震災当時、私は東京海上日動火災リスク管理部に所属していた。地震対策本部が直ちに設置され、私自身も直後の4月には福島県に現地入り。福島第一原発近くの現地の光景は凄まじいという言葉ではとても言い尽くせなかった。海岸線から3～4キロは何もなく、田んぼのあぜ道に打ち上げられた漁船の姿は今でも忘れられない。

2012年7月に退職したが、その直前の4月に日本棋院常務理事の大淵先生から囲碁アマ七段免状の推挙を頂いた。特段実績のない私としては高段位の免状は荷が重かったが、先生の「将来性を買いたい」とのありがたい一言に背中を押された。事務局からは「飛び級」と言われたこの時点では、将来囲碁クラブを開所するとは夢にも思わなかった。

2014年4月南戸塚に「南戸塚囲碁クラブ」を開き、2018年1月に戸塚駅前に店を移し、「みなと囲碁将棋クラブ」に改称して現在に至る。クラブ開所にあたり、周りの殆どの人から「1日楽しく遊んだ料金が900円ではどう考えてビジネスモデルが成り立たない。将来性もない」と反対された。正直、「顧客の高齢化と減少、後継者問題、脆弱な財務体質」の三重苦。これは、日本の2040年問題の縮図と言えよう。

それでも最初のお客様、東京海上日動火災の樋口公啓元社長から「河合君やってみたら、応援するよ」と、温かい言葉を頂いた。大淵先生からは、若手プロの奥田あや先生と田尻悠人先生を派遣して頂けることになり、何ら事業基盤もなかったが、クラブを始めることにした。お店のキャッチフレーズは「碁は奥が深く、脳と指先が刺激されて10歳は若返りますよ」。

囲碁は「序盤・中盤・終盤」の3つのゲームからなると考えている。最終的には「地(陣地)」が多い方が勝つゲームではあるが、「序盤」は地を取ることにこだわり過ぎず、まずは石を繋げるゲームと考えた方が良い。しっかり石を繋げれば、「地」は後から自然とついてくる。「中盤」は石を繋げるか地を取るか選択するゲームと考える。そして「終盤」は地を取るゲームとなる。「序盤・中盤・終盤」の区別は自分が決める。決めたら、「序盤・中盤・終盤」に合った打ち方を意識する。



「弱い石」は作らない。周りに相手の石が多くなればその分、自分の石は弱くなるからだ。石を強くする手法は3つ。1つは「他の自分の石と繋げる」。2つは「自分の力で生きる」。3つは「相手の石をとる」。どの手法もメリット・デメリットがあるが、一つの手法を多用すると弊害が出ると考えた方が良く。特に3つ目は、相手もいるので定石や手筋をより磨いた方が勝つ。ハイリスクハイリターンの手法と言えよう。

2016年1月にGoogleのAlphaGoというプログラムが、プロ棋士と対等に対戦したとの衝撃事実がNatureで紹介された。AIはその後、「ディープラーニング、強化学習、モンテカルロ」の三手法を組み合わせて驚異的な成長を遂げた。まさに、ダーウィンの進化論を電子レベルで行ったと思えてくる。

囲碁は $19 \times 19 = 361$ 目と打てる箇所が桁違いで実現可能面数は約 2×10^{170} 通りあり、コンピュータがプロ相手に勝利することは難しいと言われていたが、今では相当なハンデ戦でも勝てるプロはいない。囲碁界の前提が崩れてしまった。そこに新型コロナウイルスの猛威が襲う。三重苦の囲碁界はひとたまりもない。この1年でかなりの碁会所が店を閉じた。

偉そうに書く私の碁の実力は碁の門に漸くたどり着いた程度だ。まだまだ弱い。しかし、囲碁は必ずしも勝つことだけが目的のゲームではない。強いことが全てであれば、AIに任せておけばよい。碁盤は曼荼羅の世界と捉えることもできる。盤上の九つの星(黒い点)を気功でいうツボと見立て、七段免状に恥じないよう太極図のように打つことができたらうれしい。



もしも横浜港ベイブリッジの内と外に巨大なクルーズ船が停泊するようになり、モナコ風に変貌した赤レンガ地帯のコンベンションホール内に囲碁コーナーができれば、海外から来たお客様に腕を振るってみたい。東北の地から山の幸海の幸が届き、囲碁を通しておもてなしができれば最高だ。

今教えている生徒の中から将来一人でも、日本だけでなく東南アジアを始め海外の人との文化の輪を繋げる人に成長してくれたらと願っている。インターネットを駆使したバランス碁の達人が出てきたら鬼に金棒。日本文化としての囲碁の役割にも希望が持てる。

人間万事塞翁が馬、禍福は糾える縄の如し。